

パ ー ソ ン ズ 理 論 か ら

園 直 樹

From T. Parsons's theory

NAOKI SONO

序

1. 局面と社会保障

- | | |
|-----------------|--------------|
| 一, 局面運動, 局面及び L | 四, 政治の一目標 |
| 二, 社会保障の梗概 | 五, 歴史的変化 |
| 三, 給付保障 | 六, 資本主義と社会主義 |

2. 局面, 逸脱, パーソナリティと社会病理

- | | |
|----------|------------------|
| 一, 梗 概 | 三, パーソナリティ型の例 |
| 二, 逸脱型の例 | 四, 他局面の逆源泉としての L |

3. 主体, 客体のパラレリズム, ひづみと愛情関係

- | | |
|--------|------------|
| 一, 梗 概 | 二, 文学に於ける例 |
|--------|------------|

4. 総合と文化理論

- | | |
|--------|--------------|
| 一, 梗 概 | 二, 社会理論と哲学理論 |
|--------|--------------|

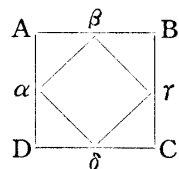
序

一

社会学は行為を研究するが行為の意味と行為の根拠に就て考えるには時日を要した。僅かに若干の或者は行為の意味を理想型概念として把え、又或者は行為の根拠に就て心理学や人間学の概念を援用して考察を進めていたのが最近までであった。だが、すべてをその意図する究極に迄追求せずにはいられない社会学の気質は行為の意味を数学に迄、行為の根拠を生物学に迄、位置づけるであろう。そして数学と生物学の関わり合いに於る理論的図式によって行為に就いて語ろうとするだろう。今吾々にパーソンズの行為理論作業論集 1953 p. 182 に於ける AGIL の局面図式はその様なものと考えられる。故にこの局面図式を説明するに当り、吾々に先ずその前年の書、社会体系 1952, p 3 及び p 557 に於て彼が翌年に示した図式への接近の仕方を明確にする事、及び家族 1955, 附録 A p.p. 395~99 に於けるこの図式に関する覚え書に就て眺め、更にこの図式をギリシヤ哲学の一傾向より考察しよう。

同書の論述の焦点は、「経験的知識の体系的説明でなく……厳密な意味で理論的な仕事として企図された理論的図式」である。それは私見によれば純粹に先験的、形式的、普遍的概念としての幾何学図式であると考えられる。その幾何学図式の中で語ろうとするのは、「人間パ

ーソナリティと社会」であり、それは、「自然に対して (over against nature) としてでなく自然の中に (in nature) あるものとして考えられる」ものなのである。では自然の中の人間とはどの様に幾何学的に表現されるのであるか。



図に於てエムペドクレスでは、A(空気), B(水), C(土), D(火), ヒポクラテスでは、A(黄胆汁), B(粘液), C(黒胆汁), D(血液), そして両者に共に、 α (熱), β (湿), γ (冷), δ (乾)である。そして例えば、 α と β を加えるとAとなる。 $(\alpha + \beta = A)$ 。同様に $\beta + \gamma = B$, $\gamma + \delta = C$, $\delta + \alpha = D$ である。又例えばAがBに変わるには β を通らねばならぬ。換言すればAとBは β を共有し、一般的には隣接するアルファベットはギリシヤ文字を一つずつ共有する。次に健康とは ABCD の調和であり、病気とはその不調和である。精神の正帯と異常も右と同じ文脈で考えられる。[森信胤著『かくて医学は生れた』昭23年, p 24, p 32 等を参照した]。

さてパーソンズによれば、「自然の中にある人間パーソナリティと社会を研究する吾々は生物学を最も近い隣人とする。吾々と生物学は人間知識に関する地域社会の両部門である。」即ちこの地域社会(例えば村)には人間知識村字生物部落と字人間パーソナリティと社会部落と

があると考えられる。吾々は視点を人間パーソナリティと社会に移そう。上図に於てパーソンズでは A(A), B(G), C(I), D(L) の四局面, α (U.-N.), β (P.-S.), γ (Per.-Aff.), δ (Q.-D.) の四パターン変数である。そして後は上挙の加算や共有関係と全く同じである。そして ABCD の調和が社会的行為及びその行為をする行為者の健全なパーソナリティである, 不調和がその夫々の逆である。

ところで人間パーソナリティと社会は自然の中であった。それが自然の中にあるとはパーソンズによれば「生物学に類似 analogy せる L の中にそれがある」のである。そして L は自然であり, それはエネルギーとして種々の欲望と考えられる。これらの欲望を A(A), B(G), C(I), D(L) 等に於て表現するのが行為であり, その表現が文化的手続即ち局面運動を通る場合が社会的行為であり, その逆が逸脱的行為である。

以上吾々は, 深く蒼い空はヘラスに通うとして, 自然村別名人間知識村の住民を古代ギリシャ人になぞらへて局面図式について概略した。パーソンズが社会体系を彼の永遠の女性である健全且つ実際の経験主義のヘレンに献げ(巻頭), 且つギリシャの経験的知識又は経験的自然(empirical "nature")を説く(p 363) 事を見ても, 吾々が局面図式を上挙の観点から眺める事にその当然さが感じられよう。

二

さてパーソンズの局面理論によって小論に於て社会保障等の問題(第一章, 第三章, 第四章)を考察する。局面からの逸脱の概念によって社会病理学の問題(第二章)を考察する。大要は以下である。

社会学はその隣接科学の問題を自らの問題として考察する事に興味を持っている。例えば社会政策に対してウェーバーの「社会科学及び社会政策の認識の客観性」(1904) 及びその発展的集大成としての「経済と社会」(1921) がある。自殺に対してデュルケムの「自殺論」(1897) がある。彼等が何故, 社会政策や自殺に就て社会学の立場から興味を持つかは夫々の著の序に明らかである。

さて現在, 社会保障に対しピグーの理論等がある。社会病理現象に対しエリオット等の理論がある。しかしピグー等の理論が社会保障に対し有効でない事はパーソンズが「経済と社会」(1957) に於て指摘(p.p 30~33) するところである。同様に社会病理学としてエリオット等の

理論は体系的でないのである。ところでウェーバーに献げられ, 且つウェーバーの著と同じ題名をもつ「経済と社会」の意図するものが何であるかは説明を要しないであろう。小論は第一章で同書をテキストに社会保障の方法を考察したい。

第二章。マートンはデュルケムのアノミーを座標を変えて考察した。パーソンズはマートンのアノミーに若干の主要な要素を附加して逸脱を考察しそれを一般理論に迄拡大した。(参照, 小論第四章, パーソンズとマートンの項)。筆者はパーソンズの逸脱等の概念によって社会病理学の方法に就て考察したい。本章は若干内容を説明しよう。「逸脱の意味」。一に云った加算によるパターン変数に即して逸脱型を考えれば, 例えば A (Universalism-Specificity) は, Univ.-Neutrality (Compulsive Acceptance) と Performance-Spec. (Comp. Perf.) である。「原因」。逸脱原因は(1) L 欠除の性格型(及び右に関連の逸脱)と(2)局面の Conformity v. s. Alienation に関する四逸脱型に対応する性格型がある。[(1)(2)の順序は局面又は源泉としての L による]。「対策」。(1)(2)による internal な対策とそれに関連する external な対策とが考えられる。

第三章。ジンメル の *Zweierverbindung* やマートンの Reference Group Theory は愛情関係の問題に有効である。しかし此等の理論が一般理論との関連の下に説明を要する事はパーソンズの指摘[社会学理論論文集 1954 p. 18, p. 354] するところである。このパーソンズ理論によって愛情の問題を考えたい。

第四章。パーソンズ理論は Relativism に於ける相対するものを総合する扇の要を持っている。この理論によって文化理論を考察する。

なお小論では, パーソンズの著を邦語の略称を以て引用する。(1)「作業論」(2)「経済」(3)「論文集」(4)「体系」(5)「家族」である。各数字の英語名は, 小論の終りに掲げる。

1. 局面と社会保障

一, 局面運動, 局面及び L

① 局面, Area 及びパターン変数は「作業論」(p. 65, p. 182) によれば以下である。(第一表)

A (Adaptation 適合), G (Goal Gratification 目標充足), I (Integration 統合), L (Latent Pattern Maintenance 潜在的なパターンの維持)。

	A < Task Area Task Area	Universalism = Neutrality Performance = Specificity > Univ. = Spec.
第一	G < Task Area Social Emotional Ar.	Perf. = Spec. Particularism = Affectivity > Perf. = Aff.
表	I < Soc. Emot. Ar. Soc. Emot. Ar.	Part. = Aff. Quality = Diffuseness > Part. = Diff.
	L < Soc. Emot. Ar. Task Area	Qual. = Diff. Univ. = Neut. > Qual. = Neut.

A	G
L	I

③ 次に局面運動である。

○ 社会統制過程 (Social Control Process)

L → I → G → A

Task Ar. の Univ.-Neut. を A と L とは共有する。L は Permissive な Univ.-Neut. であり A は Manipulation of Rewards なそれである。さてその様な L が A の報酬を得るには統制的な順序がある。その順序に就て考えよう。

S. Emot. Ar. の Qual.-Diff. を L と I は共有する。故に L → I であり I は L を Support する。次に S. E. Ar. の Part.-Aff を I と G は共有し I → G である。ところで G は他方 Task Ar. の Perf.-Spec. である。Perf.-Spec. を G は L と共有しない。同様に Qual.-Diff. を L は G と共有しない。故に G は L との相互作用の否定 (Denial of Reciprocity) を持つ。これは G が L に報酬を得る為の手続として文化の規範的側面 (禁止と命令) を教示する事である。次に Perf.-Spec. を G と A は共有する。(G → A)。最後に出発点の如く、Univ.-Neut. を A と L は共有する。(L = A)。かくて L は A に於て報酬を得る。斯様に報酬を得るには、支持や命令の順序がある。「太初にタート (Tat) あり」である。この社会統制過程は児童が社会人になる為の両親が行う教育や、一般の職業的な経済行為や経済にアクセントを置いた国の社会体制などを把握するであろう。(作業論 p. 74 家族 p. 39)

○ 個別化過程 (Individualization Process)

L → A → G → I

社会統制過程が Univ.-Neut. の Cognitive な種的な A に焦点を置いた過程とすれば個別化過程又は社会弛緩過程 Social Relaxation P. は逆に Part.-Aff. の Cathectic な個的な I に焦点を置く。そして Latent が、Integrative に結合するには、Adaptive-Instrumental と Goal-Gratification (Consummatory) の順序が必要である。この過程は「太初に退屈あり」の自覚的な社会に於ける個人の認識に発端し、退屈だから最初から感じのいゝ「他ならぬ唯一人の此の人」と信義を以て交際する友人や、配偶者とする過程である。或は趣味として学ぶ学問や、愛好者たちとの絵画の制作などである。(家族, p. 39, 及び同書「夫婦の役割」p.p. 151~55)。

○ 当為過程 (Performance Process) $L \begin{matrix} \swarrow A \\ \searrow I \end{matrix} \rightarrow G$

L は Latent-Receptive Meaning Integration and Energy Regulation Tension build-up and drain-off, A は Adaptive Instrumental Object Manipulation, I は Integrative-Expressive Sign Manipulation, G は Instrumental-Expressive Consummatory Performance and Gratification である。S. Emot. Ar. の Qual.-Diff. の L が、Task Ar. の Perf.-Spec. の G に達する過程である。これは Symbolization の過程であり「太初にロゴスあり」に発端する理想主義的な芸術や、政治にアクセントを置いた国の社会体制を把握するであろう。〔作業論 p. 182 及び「芸術家の役割」(体系 p.p. 408~14)〕。

○ 学習過程 (Learning process) $G \begin{matrix} \swarrow A \\ \searrow I \end{matrix} \rightarrow L$

当為過程が Perf.-Spec. の evaluation の G に焦点を置くとするれば、学習過程は逆に Qual.-Diff. として「what he is」の L に焦点を置く。L は S. Emot. Ar. であり、より明確には「太初にパトスあり」のパトスないし Energy である。学習過程は、ビゼーの音楽の如き芸術や、行きつりの男女が烈しい衝動に駆られて行う様な純粋な性行為などが考えられる。世界や日本や人間社会が脱落し、Leben そのものの自然に触れるフロイド、ニイチエ、ベルグソン等の理論や「運動競技の選手は走っている時に何も考えない」(ベルグソン) と云う場合の行為等である。(作業論 p. 195)。

〔なお行為の一般理論としては、当為過程と学習過程とは同一運動の観点の逆転と考えられる。前者を行為の因果論的説明 (Qual. → Perf.) とすれば後者は行為者にとっての行為の意味の目的論的説明 (Perf. → Qual.) である。この立場よりすれば行為の具体理論としての社会統制過程には、その目的論的社会学習過程 (Social Learning Process) A → G → I → L が対応する。個別化過程にもその目的論の個別学習過程 (Individual Learning Process) I → G → A → L が対応するわけである。(作業論, p. 189, 家族 p. 39) しかし又、此らの…的学習過程は、目的論としてでなく、独立の行程過程としても考えられるわけである。〕

③ 次に局面の内容につき、「作業論」(p. 16, p.p. 183

～85) を手懸りに言及しよう。

〈適合〉 Aは認識的理解 (コップの中のミルクの如く実質的思惟)と概念化 (抽象的な馬の観念の如く)を云う。Gと比較すればAは種的・社会的普遍主義と社会的当為としての凝集性であり、それはベルグソン“道徳と宗教の二源泉1932”に於ける「閉じた社会」(la société close)又は「社会の閉ぢる働き」と考えられ比喩的には呼吸の吸う方の息である。

〈目標充足〉 Gは「彼が何をしたか」(what he has done?)と云う「明らかな行為」(overt act)としての「行為」(Performance)の評価的な意味 (形式的思惟としての法律の意味の如く)を云う。Aと比較すればGは類的・理想主義的普遍主義と広義の当為としての超越性 (Aからの)と解放性であり、それはベルグソンの「開いた社会」(cette société ouverte)への「開く作用」と考えられ比喩的には吐く息である。

〈統合〉 Iは対象が情緒的感覚に於て何を意味するかと云う Cathexis にアクセントをおいた答へ (愛着又は嫌悪)であり、Aの種的普遍主義に対してIは文字通り個別主義としての個の立場である。

〈潜在的なパターンの維持〉 Gの行為が結果としての行為 (Performance)であるのに較べ、Lの行為 (Quality)は「隠れた行為」(covert act)としての行為の「動機及びプロセス」である。

④ 独立Lと源泉のL

「作業論」に於て L は Latency と云う独立の局面 [Qual. = Diff. (Neut)] であるが、Lが行為の動機及びプロセスである事を強調すればLは例えば経済的な行為の為の「肉体的・文化的・並びに動機づけの源泉」(Physical, Cultural and Motivational Resources) [経済 p. 44] となり独立の局面とは認められない。Lのこの概念の相異の理由に就て「作業論」(p. 16)及び「論文集」(p. 412)を手懸りに以下に若干私見を述べる。

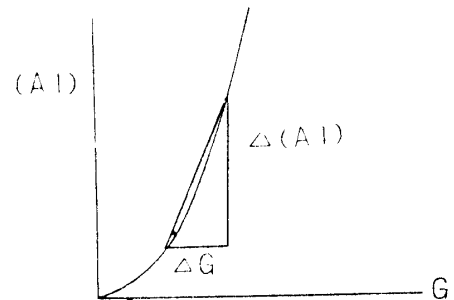
(i) 他局面と同様に独立の局面としてのL。「GはAとIを綜合する局面である」。又は「四局面の布置は任意なものではなく原理に則したものであり、例えばGはAとIの間とある」。このGとA, Iの関係を数式で考えれば $G(AI)$ である。従ってLは上挙の言葉より $G(AI)$ と並んで同格の局面と考えられる。

(ii) 他局面の源泉としてのL。Lは Latent Pattern Maintenance Phase と云う言葉自体によって $G(AI)$ の微分量として考えられる。これを数式で考えればLは $\Delta G \rightarrow O$ の状態である。この事は換言すればLは他局面

の源泉である。

今この (i) と (ii) より行為はそれ故に $\frac{G(AI)}{L}$ の函数であると考えられる。そして (i) としてLは $G(AI)$ と並んで行為の函数である。(ii) としてLは $\Delta G \rightarrow O$ として或は他局面の源泉である。

今 A. G. I. L. の関係そして (i) (ii) のLの関係は次の如く考えられる。「相互作用」(interaction)として現れるのは $G(AI)$ であり、これを微分すればLが現れる。そしてこの微分による説明は以下の微分式とその図解で示される。*



$$\lim_{\Delta G \rightarrow 0} \frac{\Delta(AI)}{\Delta G} = \frac{d(AI)}{dG} \rightarrow L$$

微分式は A. G. I. L. の関係及びLの特色を明らかにする。且つそれは次章の社会病理学での原理となる。

二、社会保障の梗概

前節第一図 (作業論 p. 182) は「経済」(p. 53)の「社会の分化した副次体系」にては次の様に適用される。

A, 経 済 (Economy)

G, 政 治 (Polity)

I, 統合を受けもつ副次体系 (Integrative Subsystem)

L, (1) 文化の、及び動機づけの体系 (Cultural-Motivational System) 又は

(2)* 経済上の委託：肉体的・文化的・並びに動機づけの源泉 (Economic Commitments: Physical, Cultural and Motivational Resources) [p. 44]

さてパーソンズの「社会の分化した副次体系」を社会保障の説明に適用して見よう。

三、給付保障

[L] 社会保障を欲する状態は失業、老令、病氣等による所得の欠乏 (want, insecurity) である。即ち「経済上の委託」としての生活手段が上挙の理由によって不足する状態である。そこで国民は失業等の状態に於ける「所

* このフォミュラは昨年東京で行われた第31回日本社会学会で発表された。

得保障に対する願望」を持ち国家はその願望をかなえるべき社会保障 (Social Security) の義務を持つ。かくて例えば当時の首相チャーチルの命により、ビバリッチの代表する B. M. S. O. は「社会保険と関連事業」(1942) を政府に答申した。これは「文化の、及び動機づけの体系」ないし「潜在的 = 受容的な意味の総合、及びエナジーの規制、緊張の確立とその流出」(Latent-Receptive Meaning Integration and Energy Regulation Tension build-up and drain-off) としての独立の L (経済 (p. 19) の機能である。そして労使及び国の所得としての賃金、利潤及び税金が源泉である。

[G] Gが「政治」と見なされるのは、Gが「手段的 = 表出的な当為と充足」(Instrumental-Expressive Consummatory Performance and Gratification) [p. 19] なる故である。このGは、例えば、前記ビバリッチ勧告によって成立した「国民保険法」1946と考えられる。

[I] 「国民保険法」に規定する事項の運営が、「統合を受けもつ副次体系」ないし「統合的 = 表出的なサインの操作」(Integrative-Expressive Sign Manipulation) [p. 19] としてのIの機能である。即ちIはGの規定に従って労使から夫々保険料を徴収する。国からは国庫負担金を徴収する。この保険料及び国庫負担金が給付の為のLの所得の再分配(反対給付)としてのIの役割である。

[A] 「国民保険法」に規定する事項の運営が「経済」ないし「適合的 = 手段的な対象の操作」(Adaptive Instrumental Object Manipulation) [p. 19] としてのAの機能である。即ちAはGの規定に従って例えば失業の場合即ち源泉Lに於ける賃金が失われる場合にその所得の保障即ち失業の給付 (Benefit) を受ける。

四、政治の一目標

社会保障の給付の範囲及びその水準は各国に於て異なる。A国ではその範囲が広く水準が高いがB国では逆である。又C国では失業給付に重点を置くが医療給付は軽視されている。この様な理由は如何に説明できるか。「経済」(p.p. 47~8) を参照に考察しよう。

此処に薬品会社があるとす。その会社では種々の薬品を製造販売する。戦前当社は覚醒剤を一番多く生産した。戦後は逆に神経安定剤を一番多く生産する。この相違の理由は時代毎に変化する顧客の需要に会社が対応す

るからである。これは経済が企業に対応する問題であり、「今何を売れば一番もうかるか?」を決定するのが各種の調査データによる当該会社の重役会議に於ける営業方針である。さて会社の経済と企業の関係と同じ事**が国の政治と政策の対応関係に於て考察される。即ち政治は集合的 (collective) な目標としての多くの政策を持っている。そして会社の営業に相応するのが政府であり重役会議が閣僚会議である。此処で「バターか大砲か」即ち軍備か社会保障か等の問題が決定される。

五、歴史的変化

社会保障は米国で社会保障法 1935 として、英国でビバリッチ勧告 1942 として、日本で憲法 1946 の第 25 条として用いられたのを嚆矢とする様に社会保障という言葉は最近の言葉である。しかしこの言葉を歴史的に考えて見れば、例えば英国のエリザベス女王による救貧法 1601、ロイド・ジョージによる社会保険 1912 も、現在の国民保険法 1946 も等しくその時代毎の社会保障である。

さて救貧法の批判 (1905) より社会政策的立法としての社会保険が生まれ、社会保険の批判 (1942) より国民保険法が生まれた。即ち新しい社会保障は所与の社会保険の批判より生れる。新酒は新しい革袋を必要とする。批判は源泉Lに於ける賃金の不足換言すれば、所与の制度では所得保障という「組織化の機能としての経済上の委託」(economic commitment as the function of organization) [経済 p.p. 95~6, 113] としてのLの機能が果されぬ時にそれを可能にする新しいLの出現〔価値の意志決定 value decision〕を希望する時に生れる。そして新しい制度としてのGが生れる。新制度は「組織の変化」(p.p. 246~8) を意味し組織の変化は政治の意志決定 (polity-decision) を意味するGの役割である。(p. 186. 262)

六、資本主義と社会主義

社会保障は日英米等の資本主義社会体制とソ連中国等の社会主義社会体制とではその目的を異にする。失業保険は前者に有り、後者に無い。その他の保険に於ける給付は前者 (例えば英国) では同一給付であり、後者例えば (ソ連では) 賃金比例主義に対応する給付水準である。後者は勤続年数を重視し、結局、社会保障の目的を労働生産性の向上に置くわけである。前者では社会保障によ

* (1) はLを他局面と同様に独立の局面、(2)はLを他局面の源泉と見る立場である。(前節、微分式参照)

** 経済は資本で政治は税金で運営される。両者をパラレルに考えれば以下の如し。A[経済(政治)の諸目標としての企業(政策)]。G[重役(閣僚)会議としての経済(政治)]。I[会社(政府)]。独立L[顧客(国民)の願望]。源泉L[資本(税金)]。

る労働生産性の向上は必ずしも期待されていないし、却って失業を是認する資本主義体制の下に社会保障の目的がある。かくて社会保障は資本主義社会の此方に於けると、彼方に於けるとに分割される。そしてこの此方と彼方の相異は、社会保障と云う行為を「経済的に適合した行為」(economically relevant action) [p. 39] と考えるか或は「政治的に適合した行為」と考えるかの相異である。後者はいま、「直接統制」direct control の一型態を用いて政治の体系の目標を追求する為に、経済の生産力を高める事」(p. 95) と考えられる。換言すれば後者は政治的な社会保障であり、これに反し、前者は経済的な社会保障と云える。

経済的な社会保障(資本主義の)と政治的な社会保障(社会主義の)の説明は、本節「社会の分化した副次体系」に於ける局面の説明及びそれに相応する前節(2)に於ける局面運動と(3)の局面の内容によって可能であろう。即ち資本主義の社会保障は経済ないし社会的普遍主義としてのAに目標を置いた社会統制過程であり、社会主義のそれは政治ないし理想主義的普遍主義としてのGに目標をおいた当為過程である。

2. 局面, 逸脱, パーソナリティと社会病理

一、梗概

研究者が仕事をしている時、研究している事以外の何物をも念頭にないから来客と対談中に、とんちんかんな返事をして来客を途方に暮れさせ事があるだろう。それは別に大した事ではないが、銀行ギャングとなると話は別である。彼は金以外の何物をも思わず、金を得る最短距離を持つ。彼は社会統制過程 L→I→G→A を通らず

に、L→A の目的それ自身に突進する。かくて一般に逸脱とは局面運動で局面が連がらぬ事、又は始と終りの局面が直接に結合する事、又は目的の局面それ自身が他局面との交流を失って孤立ないし over-independence となる事と理解される。故に夫々の局面を構成するパターン変数の対応的強調として夫々の逸脱タイプが把握される。ついて逸脱の原因は結局、行為者の裡に起る動機づけの過程(「体系」p. 202)つまりパーソナリティ・タイプに由来するから一般に認められた精神医学でのパーソナリティ・タイプを逸脱タイプに対応させる。即ち以下の図式を得るであろう。(Fig. 1 参照)

この図式はパーソンズの諸著から目的そのものの地盤*の上で選んだ概念を整序した。局面とパターン変数は前章の通り。各局面の夫々上段のパターン変数に対応する逸脱タイプは「作業論」(p. 68. p. 74), 下段のそれは、「体系」(p. 259)である。但し「体系」では局面は方面(Direction)なる言葉である。又、「体系」では Aggr. は Rebelliousness, Comp. Accept. は Comp. Acquiescence なる言葉である。次に Task area に Conformative Side が, Social Emotional area に Alienative Side が夫々対応する。次に Qual.-Diff. としての独立パターンのLと他局面の源泉としてのLの説明(前章, 微分式)と同じ文脈で Withd. としての独立の逸脱のLと他局面の逆源泉としてのL及び癲癇としての独立のパーソナリティのLと他局面の逆源泉としてのLが把握される。即ち「家族」(p. 254)ではLは他局面の逆源泉(Dys-Resources)と考えられ、他局面の如く一独立の Personality Type と認められない。しかし私は独立パターンのLとその逸脱タイプに即応するパーソナリティ・タイプを癲

Fig. 1

局面	パターン変数	逸脱タイプ	パーソナリティ・タイプ
[I] A Univ.-Spec.	< Univ.-Neut. (Task ar.) Perf. Spec. (Task ar.)	Compulsive Acceptance (Conformity) Comp. Perf. (Conf.)	> Schizophrenia Paranoia
[II] G Perf.-Aff.	< Perf.-Spec. (Task ar.) Part.-Aff. (S. Emot. ar.)	Comp. Perf. (Conf.) Aggressiveness (Alienation)	> Mania Depression
[III] I Part.-Diff	< Part.-Aff. (S. Emot. ar.) Qual.-Diff. (S. Emot. ar.)	Aggr. (Alien.) Withdrawal (Alien.)	> Compulsion Neurosis Psychopathic Personality
[IV] L Qual.-Neut.	< Qual.-Diff. (S. Emot. ar.) Univ.-Neut. (Task. ar.)	Withd. (Alien.) Comp. Accept. (Conf.)	> Epilepsy
[V] 他局面の Resources としての L	*	他局面の Dys-Resources としての逸脱 即ち Withd.	他局面の Dys-Resources としての Personality System 即ち, Internal Object-Motive Structure Impeding "Normal" Adjustment (System of Defenses)

* Physical, Cultural and Motivational Resources 即ち Internal Object-Motive Structure Indicated Normal Adjustment

癩と考えた。理由は、Gがパーソナリティ・タイプでは Compulsive Alienative な者として、Alienative な I に連続的に隣接し、逆に L は Conformist として Compulsive Conformative な A に連続的に隣接するという如くに説明されているからである。(「体系」p. 271. 286, esp. 「作業論」p. 249)

さて上挙の図式によって、逸脱タイプとパーソナリティ・タイプを、そして第四節(四)では他局面の逆源泉としてのパーソナリティ体系の問題を夫々考察する事にしよう。

二、逸脱型の例

Lの逸脱を例として考えよう。

○ Withdrawal. 「退行」は先ず Qual.-Diff. なる独立パターンのLに対応するLに於ける独立の逸脱タイプとしての Withd. が考えられる。これは豊かなエナジーを持ち乍ら、それを表現する手段が下手な為、目標に適応出来ず空転する場合である。

○ Compulsive Acceptance. これは社会統制過程 L→I→G→A を通らずに報酬としての Task 的 Conformative なA的権力を求める (L→A), 白痴的に強引な権力主義である。

○ Withd. Task-Oriented や Conformity は G の理想主義的な、或はAの社会人的な、権力主義に存在する。これらの方向の行為である当為過程 $L \begin{matrix} \swarrow A \\ \searrow I \end{matrix} \rightarrow G$ や社会統制過程 L→I→G→A が首尾よく完了した時、或はそれが行き詰った時、評価のGないし報酬のA的権力が大となるに不拘、G, A の立場から希望されぬ反意志的ないし反生活的な反権力主義の Etwasが自らの裡に発見されるであろう。夢に壓され臥薪嘗胆して獲得した権力ないし権力を目前にして何故英雄や英雄的研究者の顔は憂鬱なのか。この憂鬱はA的, G的陽に対する影の部分、砂漠的風土の心情に対する鼻孔を濡らす夜霧の心情、そしてガリレオ的感覚に於て振子の反対方向を思う時に生れるであろう。それは結局、Social Emotional な Alienative, Cathectic な I 局面そして現実的には、今も働い

ているのであろうブロンズの乙女や故里の父母や妻や友人に対する回想であろう。そしてその時人は武器を捨て、馬首を回転して自分を今も待つであろう者、又は家庭に向って進む。即ち個別化過程 L→A→G→I である。ところでマートンの文脈⁽⁴⁾に即して考えれば当為過程や社会統制過程は、自己成就の信条に由来し、反対に此らの過程に対する上挙の憂鬱、疑い、非合理的心情、そして社会的な生活に対する死の事柄は弱気地獄又は自己敗北の信条 (the self-defeating belief) ないし、自殺的信条 (the suicidal belief), 自己成就に対する退屈の精神に由来し、それによって個別化過程が始まる。しかし余りに長く自己成就の戦いに従事した者、或は嘗ての恋人や家庭が既に現実に消失した事を発見した者、或は新しい恋人を探すのも面倒な者は、個別化過程を通らないで、L→I としての Withd. に行くのである。かくてこの Withd. は、上挙の退屈や自己敗北の持つ社会的な個別主義から社会的な連り (L→A→G→I) を控除した、deteriorate な倦怠や人倫的自己的放棄の信条として把握されるであろう。それはホルネイの文脈⁽⁵⁾に従えば、アクビを噛み殺して外見はスマートに、美女と快楽に耽ったり、「デラックスな家屋と百万弗の収入と自動車、そして説教のない雰囲気のために執筆する売文業者」である。しかしホルネイのいう Bohemian としてでなく、L→I の倦怠を外部の快楽で胡魔化せずに倦怠が持つ内部に宿る死の信仰⁽⁶⁾に耐える一群の異邦人⁽⁷⁾ (der Fremde, stranger) もいるであろう。しかし両者は共に、独立としてLのに対応する退行としてG的、ないしA的 Task Area からの Withd. である事に変わりはない。

次にもう一つの Withd. である。吾々は、時に旅行や海やビールを思う。或は、ワイド・スクリーンの海洋劇や大草原を気の向くままに走る馬を思う。そういうものに実際に触れた時吾々は、気むつかしい世間の綻から解放された幸福を感じるのであろう。唯、海等として把握される Qual. のエナジーの L に達するには、Conformative な手続が必要である。即ち個別学習過程 I→G→A→L

* 目的そのものから彼の諸著を読む必要は形式的には「体系」が彼の単独の書、「作業論」や「家族」は Interaction Process Analysis 1950 の Small Groups のベールズ** との共著の故に若干の説明のずれがある。しかし、本質的には此の局面理論の創始者は創始者として当然、直接にして物自体的なものを問題として残している。その様な問題を一個の問題として発見し取上げるのが、彼の跡を歩む吾々に遺された課題である。そして創始者の理論の表象は思想としてでなく、合目的な内的感情として吾々に伝えようとする。かくて生命的にする原理としての精神より、吾々は原理を自己に即して把握しなければならない。そしてその事が彼の文章を文法的に且つ内容的に読んでの理解である場合のみそれは許されるのである。それは又、小論が序にギリシヤの論理から出発した所以である。

** ベールズの Task Area に Questions と Attempted Answers の二つの次元が含まれる。両者はパーソナルの A, G であり、Social Emotional Area (Positive Reactions, Negative Reactions) は I, L である。(作業論 p. 65)

である。しかし余りにも海的なもの、ないし原始的なLのエネルギーを自分の故里として郷愁と休息を感じるものは、右の手続を通らずに直接にI→Lの退行の道を通るであろう。吾々はその様なケースとして一般社会から除け者として土人の島に住みついた白人や特殊なケースとして、ゴーカンのタヒチ行(ホルネイ)、スティーヴンソンのサモア行(マートン)等を挙げる。

- (4) Merton, *Social Theory and Social Structure* 1958 p. 129, p. 224.
 (5) Horney, *Neurosis and Human Growth*, 1951. p. 287. 285.
 (6) 例えば Simmel, 個体的法則(生の哲学) *Soziologie, Appendix, der Fremde*, や彼のレンブラントに於けるリルケ、或はケルケゴールに於ける「不安の概念」, 「死に至る病」等。

三、パーソナリティ型の例

既述の図表の如く種々の逸脱タイプは種々のパーソナリティ・タイプに還元される。そしてパーソナリティ・タイプによって、所与の人物がどの様なタイプの人を好み或は嫌うか、そしてポーズでは誰に接近し実際は誰に接近するか、或は彼がその作品で、何を好んで主張し、何を嫌うか、等の問題が逸脱の研究と同様に必要となる。吾々は例えばニイチエが *Leben* を強調する時、それを強調せねばならぬ彼の性格が何であるかに興味を持つ。或は、マルクスが剰余価値の発想を何から得たか。又、ヘーゲルが何故観念論を好むか。そしてかのヘルダーリンが文章の行間に秘かに示すもの。更にジンメルが権力に対して興味を以て述べる時、彼の住む人生の深みに就て。この様な事柄は、諸家の理論を関係的に読む時に理解して置く事が必要である。その為には、パーソナリティ・タイプによって局面の *Conformity v.s. Alienation* を説明せねばならない。

(1) 対立関係

A v.s. I 即ち *Conformity v.s. Alienation*

A(分裂気質)は凝集的な *Conformist* であり *Affectivity* に *Neutral* である。これに反し神経症や興奮性精神病質のIは、不合理な *Part. na Aff.* がA的意志に反して表われるから *Alien.* なのである。

A v.s. G *Conf. v.s. Alien.*

Aは分裂気質なる故、*Univ.=Neut.* ないし、*Comp. Accept.→Perf.* の傾向を持つ *Conformist* としての権威主義者である。(Comp. Coformative)。このA的世界に抑鬱を感じ其処から超越的に *Alien.* な世界に逃走ないし突進するのがGの面目である。先ず *Aggr.-Evasion* の

ケースとして一。「[重要な定職にあったゲーテが突如としてイタリアへ失踪し其処で二年間愉快で陽気で束縛のない生活を享受した]。[文学に於ける *Farce* 的に乾燥した飛躍的な笑い]。[賭博者の *Maniac* な熱中]等]が挙げられる。次に *Aggr.-Perf.* のケース。[A的国民国家に対しG的基督教的人格主義の立場から批判するウエーバーや、A的価値(資本制)それ自身をGの *Perf.* の立場から分析するマルクス]等]。このケースはAなる *Conf.* な構造に対する興味が激烈な批判精神に由来する。時にはマルクスの如く完全にAを憎み且つ嘲笑し価値を転倒せしめる。これらはGの *Alien.* な戦斗的 *active* な態度に帰因する。Gの *Aggr.-Perf.* が *Topman* 又は *Scapegoat* と云われる(作業論 p. 249) 所以である。彼は、*Comp. Alienative* なのである。

G. v.s. L *Alien. v.s. Conf.*

Gが所与のA的社会と斗い新しい人類的な社会を目指す理想主義者であるのはGが快活と憂鬱と云う両極点を往来する気質なる故である。彼はAと斗う武器(弾薬)をLの世界から得る。LはGにとって斗いの原動力であり且つGを混乱せしめる力でもある。今マルクスをG、ヘーゲルをLとすれば前者が後者から受けた影響と混乱を知る事が出来るであろう。マルクスはヘーゲル哲学に接した時の心境を手紙に書いている。「私の命題は結局はヘーゲル体系の出発点であった。ヘーゲルはギリシヤ神話の海乙女のように私を誘惑する。私はいらいらして数日間何も考える事が出来なかった。そして魂を洗い清めお茶をうすめる為に河岸を走り廻ったり猟に行った。そしてやっと勉強らしい勉強にとりかゝった」と。纏て彼はヘーゲルを遮越し、且つA的価値に対し *Neutral* な科学性を主張するI的表現を身に着けるに至る。「私の弁証法的方法は——と彼は述べている——その基礎に於てヘーゲルのそれと正反対のものである」。且つ「ヘーゲルから得たのはその合理的な環だけである」と。

さてヘーゲルが癡癡気質のLなる事は、自明であろう。彼はIとしてのシェリングの哲学を「すべての手の黒くなる夜」としてその「形式主義」(*Ritualism*)を批判した。それは癡癡気質はI的な *Emotion* に極めて鈍感なる故である。シェリングが纏て、ヘーゲルに不快の念を持つのは、ヘーゲルがA的なファイヒテに接近するからである。即ち弁証法に於て定立をAのファイヒテ、反定立をIのシェリングとすれば、フォイエルバッハの云う様に、「ヘーゲルはシェリングに媒介されたファイヒテ」として存在する。ヘーゲルはファイヒテの *Conf.* な且つ *Comp. Accept.→Perf.* の「読者に理解を強制(ツウインゲン)

する」自我とその秩序を好む。そして弁証法はフイヒテないしヘルダーリンの自我の分裂から導き出された方法であった。それはヘーゲルの「総合」に於て明確に爆発を経ての均衡として癲癇気質の発想として発展した。そしてその総合は、A 的 Comp. Perf. として構造的に Conf. な G の観念哲学であった。[この様な G の把握に対し、逆に G は機能的、性格的に Alien. であると考えてヘーゲルを批判するのがマルクスである]。

(2) 親愛関係

G と I Alien.

ウェーバーの如く G は A に対し Aggr.-Perf. であり、A 的価値に対し Neutral な科学性 Wertfreiheit の主張をする。この発想は、G → I の過程である。I は G のパトロン (例えばマルクスに対するエンゲルス) である。A と闘う G の戦斗的理想主義的当為に比較して G と共に Alien. である I は、A 的価値を Ironie を以て諷刺する。又 I は G に時に mistificational な humour を示す。[息苦しい A との闘いに生きるマルクスに対し自足的な情緒性を以て変らぬ友情を示すのがエンゲルスである]。

L と A Conf.

癲癇気質の L は時に意志薄弱な浮浪者として構造的には、I に接近する、Alien. な面を示す。しかし彼は、本質的には秩序的な A 的権力に向って進む、暴君であり、情緒性を欠いたタフ・ガイである。この様な L を A が許容するのは、L が A と共に Conf. であり、更に A にとって L が自己の理論を G の理想主義の方向に発展させ後輩と見なされるからである。[これに反し、Alien. な I や G を A は畏敬する]。

× × ×

非行、強盗、通り魔などの犯罪、自殺等、逸脱の原因を動機、更にはパーソナリティとの関連の下に考察される事の必要は、ホルの犯罪学やパーソンズの「体系」(p. 225) に指摘するところである。そこで逸脱の研究の為に且つ精神病の研究の為にパーソナリティ・タイプの分析が必要となる。パーソンズによれば、精神病者とは——正常な社会的役割の責任から免除された人である。そして病気の為に道徳的責任を負わず事の出来ぬ人であり、それ故に看護を必要とする人である。(体系 p. 437)。

さて吾々は病院で種々の患者に接するであろう。分裂病者。「デス・マスクの様に冷たい静かな寝顔。短くて聳えた鼻柱を中心にして削り取った様な両頬」。癲癇病者。「自己主張と他人への不満。饒舌と主題の繰返し」。これらが吾々と同じくランドセルを背負って小学校へ通い、海辺で恋を語り、働き結婚し、そして戦争に従い、

戦後に買出に行った人達なのであろうか。彼らは回復して退院するのであろうか。

精神病院の役割は何であるか。患者は回復する為の手段に従う事を強制されている。更に患者は、回復の処遇に於て、医者及び彼の協力者(看護人、医療ケース・ワーカー)から技術的に適切な援助を得べき道徳的義務を負わされている。(体系 p. 437)。医者は、それ故に、電撃療法、集団心理療法、作業療法等を行い彼の協力者はその指示に従って右の療法に参加したり、患者の家の訪問等を行う。これらの病院の役割は患者を社会に復帰さす事である。

パーソンズの文脈に従えば精神病は一つの局面に於て孤立し、他局面と関係を持たぬ事である。即ち分裂と偏執病の A は、I (Part.-Aff.), G (Perf.-Spec.), L (Qual.-Diff.) を欠除する。G の躁鬱病は、L, A (Univ.-Neut.), I を、強迫神経症と精神病質の I は、A, G, L を、癲癇の L は、G, A, I を夫々欠除する。この観点に立って上挙の電撃療法等は例えば分裂病患者が A に於て固定化し、荒廢の過程を辿るのを防ぐのである。それは患者に刺戟を与え、他の局面を思い出さずであろう。記憶の想起は、或は彼にとって苦痛のものか、或は懐しいものであろう。更に彼は現在が何時であり、此処が何処であり、彼に接する人々と自分自身が誰であるかを知るであろう。更に彼は退院後の夢を持つであろう。彼の夢となる家族、職場、地域は如何なる階層に属し、又それは如何なる Conf. ないし Alien. なタイプなのか。其処が再び葛藤の場として空想されるのかそれとも懐しい場所なのか。夢は愚者のパーソナリティに従って、方向とその内容を異にするであろう。例えば——分裂の A は、Alien. な G を汎神教的な秩序下の神の如くに思い、Conf. な L を百姓生活と思うであろう。躁鬱の G は、Conf. な A を社会政策の対象として思想の高みから眺め様と身構えるであろう。或は Alien. な I を南国の壮大な眺望と思うであろう。強迫神経症の I は Conf. な L を南海の孤島と其処に住む素朴な土人と思い、Alien. な G をリルケの云う如き天使と思うであろう。癲癇の L は I を姉女房の如くに思い A を家運再興の為に必要な兄弟の協力と思うであろうか。

さて吾々が、精神異常や犯罪等の行為を「現実的に」(really) 理解する為には、観察者の役割から離れて対象者のパーソナリティに「同化する」(assimilate) べく努力する必要がある事はホル等の指摘するところである。その様な同化は、研究者に表面的には社会人であっても、内心に考える事が、社会にとって余計者である自己を実感する事を要求するであろう。だが、それは研究者に課

せられた事であり、吾々の直接の問題は、自らを逸脱者に同化するに託するに足る理論的図式を獲得する事である。その際に、吾々の社会に於ける病める者の役割に就てのパーソナルの理論的図式が吾々の問題に対して極めて有効である事は諸家の指摘* するところである。吾々は、パーソナル理論に即した、前節の説明** を引照基準としてこの問題を今後*** に押し進めたいと思う。

四、他局面の逆源泉としてのL

此処では、前節の図より他局面の逆源泉のLに対応する Personality System の阻害としてのLとそれに対する対策としてのケース・ワークが取扱われる。

さて他局面の逆源泉としての Withd. は四局面それ自体からの Withd. であり、死、疾病等としての一切の行為又は社会的行為の終りである。疾病の一つとして異常パーソナリティとしての精神病がある。これは他局面の逆源泉としての System of Defence である。即ちLが Qual.-Neut. として独立のパターンを持たないと、夫々の局面運動（小論第一章）が始まらぬし、局面運動（因果論的説明）はこの独立のLを夫々の行為の原動力（energy）、他局面の源泉とするのである。（第一章、微分式を参照）。Lが行為の源泉でなくなる事、即ちLが局面運動で結ばれぬ事は、先ず行為者の内的構造としての Personality System に於てLが Normal Adjustment に impeding な構造なる事を示す。即ち、他局面の源泉としてのLに逆に対応する Dys-Resources としてのLとなる。この様な Impeding のLがA的に Impeding でありヘルダーリンのケースの如く源泉としてのLが二度と訪れぬものなる時に、Paranoia-Schizophrenia [偏執病と分裂病のAの中での Impeding の相異に就て説明されているが今は問わぬ] としてのAとなる。[家族 p.p. 254~5]。強迫神経症等のIや躁鬱病のGも同様である。そして例えば分裂病者は社会統制過程は勿論、cathetic な個別化過程等を失う。この様な Impeding のLを Resources としてのL、換言すれば

立としてのLに回復させ局面運動を indicate するのが、精神病院の役割（体系 p. 437）である。

さて精神病院に於けるケース・ワーク（医療ケース・ワーク）の対象者 Client は、自助能力に欠ける者である。彼は自己の問題解決の援助を求める。Client は精神病者に対するパーソナルの解釈と同じ文脈で考えられる。即ち精神病者は病気の内的原因 (Internal Object-Motive Structure Impeding Normal Adjustment) を持ち、患者としての Client は、その社会的誘因としての外的原因 (External O. M. S. I. N. A.) を持つ。つまり前者はそれ故に、病院で内的な Impeding の理由の診断によって病名が診断され、後者は、外的な Impeding の理由を入院以前の職業的、家庭的環境によって診断される。例えば彼が「経済上の委託：肉体的、文化的及び動機づけの源泉」（経済 p. 44）としての生活手段が失業等によって生活必要に対し defenses ないし不足する状態である事（貧困）や、「夫婦の委託：肉、文、動、の源泉」としての共同生活が性的不満等によって解体する状態である事（家庭不和、離婚等）が発見される。

入院中の医学的治療と同じ文脈で各種の社会資源を活用する社会的心理的な CW の治療（例えば家庭との連絡、花造り、遊戯等）が行われる。此らの二側面† の治療の目的は、夫々患者を上挙の局面運動に結合する為である。退院間近の患者——それは医学的には、既に回復し、局面運動で結ばれた。しかし社会的には患者は未回復である。彼は間もなく社会に帰還する。しかし彼は長年病院に隔離された。世情は入院前と異り自動車は溢れ、職場は失われ、彼の母は老け、妻は逃げているだろう。老母は入院前の彼が病気の為にせよ、彼女に乱暴した事実の恐怖を忘れないし、近隣は彼を冷笑し、嘗ての又は今後の職場の同僚は、彼が病者であった事を吹聴するだろう。世間は社会的弱者を虐待する事に興味を持つ。その様な状況に対しワーカーは、患者に、それに抵抗しうる自信‡ と人間信頼を植えつけると共に、患者と社会

* 例えば Hollingshead, Redlich, Social Class and Mental Illness 1958, p. 353.

** 筆者は Conf. v.s. Alien. の説明をLを癲癩とする事で行った。筆者の同僚、近松良之氏は、「ABC 表による性格論と芸術論」（人文、1959）に於てパーソナルの此の問題を A. B. C なる氏独自のパーソナリティ・タイプ理論で説明している事は、大いに注目されている事である。

*** 筆者は、嘗て「社会階層」（論文集）に於る局面理論や「作業論（IV）」「家族」（V）のベールズの小集団に於る調査項目等を参考に最下層の職業である日雇に就て「ボーダーライン層の意識過程」（日本社会福祉学会編、日本の貧困、1958 に所載）にて調査した。日下は精神病者、浮浪者、自殺者、母子心中、強盗、通り魔等のパーソナリティを日本の文化パターンとの関連の下に考えている。文化とパーソナリティと云う macroscope と microscope なものの結合にはパーソナル理論が有効であろう。

† ケース・ワークは Psycho-Social の総合の観点から体系的に考察するの必要は、ハミルトンの指摘である。

‡ ワーカーは、Client が自らの裡に社会人の復活を実感させねばならぬ。人は、「お前の根を下せ、これからお前はやり直すのだ」と日記には願望として書くであろう。しかし実際には生活再建は肉体的、心理的、社会的に困難である。しかし彼を或は励まし、或は「人間到處在青山」と慰め、社会人になるように仕向けるのが、ワーカーの役割である。

との間に局面運動を結ばねばならぬ。退院後——。ワーカーは嘗ての患者が再入院しない様に、既述の局面運動に就て After Care を行う。嘗ての患者は、自分だけ食事に卵がある事又は無い事という些細な事に、家で自分だけ優遇され、又は除け者にされていると、夫々気を悪くする。社会人になるには暇が少くであろう。医療ワーカーは、精神病院から退院した人が再び社会人として取扱われる様に彼とその社会に対して努力する。これは、刑務所から出所した人々を扱う司法ワーカーに就ても同じ事が云える。

3. 主体と客体のパラレリズム、ひづみと愛情関係

一、概 要

パーソナルに於てパターン変数の組合せは重要である。p. v. は前二章の如き観点からも考察されるが本章の様な組合せの考え方もあるのである。さて局面は、p. v. に相応する。p. v. は「客体への構へ」(object-orientation)と「主体的態度」(attitude)によって構成される。前者は個々の行為者の行為の結果として成立するパターンである。これに対して後者は、その様な前者の行為が、そこから出てくる場所のものを個人のうちの「動機づけ」(Motivation)に求め、そこにあると仮定せられる internal な秩序としての「態度」である。本章の目的は、「主体的態度と客体への構へ」の概念をプラクティカルなセンスで愛情問題をテーマとして把握する事(第一節)。及びそれを種々の人間像を吾々に提示する文学作品で説明する事(第二節)である。

主体的態度と客体への構への関係は「作業論」(p.182)では以下 a. b のどれかである。これは例えば経済的な行為は、経済的な動機と態度に由来すると云う事、即ち主体、客体のパラレリズムである。しかし「家族」(p.134. p. 384)等に示唆する様に現実の文脈に於て例えば利害関係を持つ人に対して当面する個人は「心で泣いて顔で笑う」と云う主体、客体の「ひづみ」(skewing)を自ら知っているであろう。これは、c. d の場合である。

局面	客体への構へ	主体的態度			
		a	b	c	d
A	Univ.	Neut.	Spec.	Aff.	Diff.
G	Perf.	Spec.	Aff.	Diff.	Neut.
I	Part.	Aff.	Diff.	Neut.	Spec.
L	Qual.	Diff.	Neut.	Spec.	Aff.

このパラレリズム又はひづみは Dyad の人間関係に於て把握されるであろう。今客体への構へを外から観察し

得ると云う意味で「行動」(Behavior)と云い、主体的態度を観察し得ぬと云う意味で「意識」(Consciousness)と呼んでおく。そして所与の「私」に次の質問を試みる。

- 1 私は君を行動で愛するか? [Yes (+), No (-)]
- 2 君は私を行動で愛するか? [Yes (+), No (-)]
- 3 私は君を意識で愛するか? [Yes (+), No (-)]
- 4 君は私を意識で愛するか? [Yes (+), No (-)]

○ 答えの Yes か No には夫々肯定又は否定の強度があるにしても答えは Yes か No かの2つである。今この2なる数字を n としておく。

○ 質問は 1, 2 の「私の行動」(M. B)「君の行動」(Y. B) 3, 4 の「私の意識」(M. C)「君の意識」(Y. C) の4つを一セットとする。今この4なる数字を r とする。

さてこの一セットとしての質問の回答は、重複順列 n^r に従って以下の16通りのどれかである*。

	MB	YB	MC	YC		MB	YB	MC	YC
1	+	+	+	+	9	+	-	+	-
2	+	+	-	+	10	+	-	-	-
3	+	+	-	-	11	+	-	-	+
4	+	+	+	-	12	+	-	+	+
5	-	+	-	+	13	-	-	-	-
6	-	+	+	+	14	-	-	+	+
7	-	+	+	-	15	-	-	-	+
8	-	+	-	-	16	-	-	+	-

○ 二人の行動から見て I 1~4 は「仲良し型」(例、結婚)、II 5~8 は「私が君を振る方の型」(例遺棄)、III 9~12 は、II の逆の型。IV13~16 は I の逆の型。

○ 二人の行動と意識から見て、1, 5, 9, 13 は一致型、他は不一致型である。

○ 一致型は私と君が互に行動と意識で一致する事。即ち二人に於て主体、客体がパラレリズムである事、(a, b の場合)である。これは例えば私が A [Univ.-Neut (a), or Spec. (b)] なるを指す。

○ 不一致型は逆に主体・客体・ひづみの場合、例えば私が A [Univ.-Aff. (c) or Diff. (d)] の如く、c. d の場合である。

回答が16のうち、どれであり、そして行動がどの様な局面であり、意識がどの様な局面であるかは、回答者に+又は-として回答する理由を、記述せしめる事によって判明するであろう。そしてこの形式の Problematic Planing は三つの方向に於て利用できるであろう。

* このフォミュラは、今年大阪での日本社会福祉学会第17回関西西部会で発表された。

第一は、時間の導入により例えば既婚者が過去から現在へと如何に密接の又は冷却の過程を経たか或は元のサヤに戻ったかどのナンバーからどのナンバーへ移行するかの問題である。

第二は恋愛 Counseling 及び離婚の真相調査である。恋愛相談は相談に来る者自身が相当に混乱している時及び誇りとみじめさの Complex と嘘を持つ時に示唆を与える事である。示唆を与える者が客観的に示唆すればその示唆は、優等生の答案の様にソツがないが、もう一つ相談に来る者にはピンと来ぬ。他方、示唆を与える者が相手に余りにも共感を持ちすぎると、その示唆は、客観性を失う事になる。それで相談に来る者と示唆を与える者とが、共通の下敷で当面の課題を考えねばならぬ。それにこのプランは応用できるであろう。同様の事が離婚の真相調査である。例えば低所得階層の住む児童福祉法による母子寮の婦人の離婚の原因を質問する場合に、「あなたの結婚は、見合か恋愛か？」とか「子供は何人か？」と聞いたって真相は把握されぬ。例えば回答が「見合」であるのに、戸籍を調べると「内縁」である。又「子供が一人」であるのにそれは現在、一緒に暮らす子供の数で、戸籍によれば他に長男とか次女とかの順序のない「男」の子が二人いたり「女」の子が一人いたりする事が発見される。吾々のプランは此の様な誤りを最少とする基盤の上で調査が出来るであろう。同様に日本の法的離婚は「その他婚姻を継続し難い重大な事由がある場合」と云う第三者には真相の判らない箇条で離婚を認めるケースが多くあるが、その様なケースの分析にもこのプランは有効であろう。

第三に同一又は異った社会階層での恋愛や結婚に就ての傾向調査である。例えばホワイト・カラーと職人では異なるであろう。又学生層に於ても医学部の学生と文学部の学生とは異なるであろう。[これらの調査には「論文集」の「社会階層論」の局面図式やペールズの小集団の調査項目「作業論」「家族」が参考となる。]

二、文学に於ける例

流行歌や文学は、男女の関係を離れては語れないであろう。若干のケースを考えよう。

MB YB MC YC

1 + + + +

「人間の条件」に於ける「私」(梶)と君(美千子)である。標準型、常識型のケースである。

2 + + - +

「赤と黒」に於ける「私」(ジュリアン)、君(マチルド)。これは、下層階級の私が出世する為の結婚である。

3 + + - -

これは二人とも「太陽族」の様に、愛の意識は不要であり、行動で快樂を求める場合である。

6 - + + +

「椿姫」に於ける「私」(椿姫)と君(アルマン)、「荒神山」に於ける「私」(吉良の仁吉)と君(おきく)。これらのケースは恋人の父や、自分の兄貴分の要請の為に義理と人情にほだされて別れる封建的なケースである。

9 + - + -

バルザック「谷間の白百合」に於ける「私」(フェリックス)、「君」(伯爵夫人)、「フローベル「感情教育」の「私」(フレデリック)、「君」(アルスー夫人)。これらは、「君」の行動に一喜一憂しながら酬われぬ、ロマンチックなケースである。

14 - - + +

僧アベラールと尼エロイズの間に交された魂の愛情の交流である。

16 - - + -

「私がたとい、貴方を愛しているとしても、それが貴方にとって何の関係がありません」と云う「ウィルヘルム・マイスター」に於ける「私」(フィーリネ)のケース。或はキェルケゴールの「私」が、レギーネの「君」に持ち続けたケース。これらは、Iの結婚愛と対極の対象を透明にする愛、ないし基督教的な無償の愛である。[なお15の---+の場合は狭き門の私(アリサ)と君(ジエローム)と考えられ、アリサは彼への愛を神への愛に切り替えるのである。]

4 総合と文化理論

一、梗 概

此処に云う総合とは、I局面を指すのではない。パーソンズに於ける「総合」(Synthesis)としてのIntegrationの概念である。その様な総合は「作業論」(p. 16)に次の様に語られている。「GはAとIを総合(Integration)する」[但し、同頁では、GはThe Third mode又はevaluation, Aは、the first mode又は、cognitive meaning, Iは、the second mode又は、cathectic meaning、となっている。局面はp. 180以降に出て来るが、以上の言葉がG. A. I.なる事はp. 180以降で明らかである]。さて筆者は本章に於て「GがAとIを総合する」と同じ文脈で「AはGとLを総合する」という風に各局面に於ける総合の概念を考察したい。(第一節)。第二節は右の考えによって、種々の社会理論と哲学理論の位置を明確にする試みである。

組合せ nC_r に於てnを四局面、rをその中から任意に採る二局面とすれば以下の六通りを得る。

	a	b	c	(or)
1	A	I	G	(L)
2	L	G	A	(I)
3	A	G	I	(L)
4	G	I	L	(A)
5	I	L	G	(A)
6	L	A	G	(I)

[右に於て夫々 c は a と b を綜合する]。

この組合せ式は諸家の理論が右の6通りのどの型より研究されているかを把握するのに有効であろう。例、パーソンズ、トルマン、クラックホーン等の夫々の論文を集成した *Toward a General Theory of Action* 1951 に於ける夫々の立論の拠点を知らうとする場合。或はパーソンズ理論を援用するパウルソンの芸術論やベラの日本の封建社会の研究の援用の使い方等。更には *The Structure of Social Action* 1937 に於てパーソンズはウェーバーやデュルケム等の四人の社会理論を夫々如何なる地点より考察しているか? [これと比較してマートンに於てはウェーバーやデュルケムはどの様に扱われているか?]。そして社会保障等の側面と共に福祉それ自体の理論を考察する福祉学の側面に関する諸家の福祉概論に就て。これらの事柄が常に筆者の念頭に去来する問題であるが、これは今後の課題である。さて次節では、局面理論に即して哲学と社会学に就ての諸理論を上挙の式によって考察しようと思う。

二、社会理論と哲学理論

(1) の例、ヘーゲルとパーソンズ

ヘーゲルの客観的精神としての法哲学に於て A (a) は人倫 (Sittlichkeit), I (b) は道徳 (Moral), G (c) は法 (Recht) と考えられる。L (c) は彼に於て latent なものとして活字に表われていない。[弁証法に於て A (定立), I (反定立), G (綜合) とする時、「作業論」(p. 182) に云う「潜在的=受容的な意味の綜合」としての独立局面の L が見当らない]。G と並んで L を独立の局面として且つ綜合の局面と考えたのがパーソンズである。

(2) の例、社会的法則と個体的法則

人間は社会生活なしに人格を構成する技術を発達さす事は出来ぬと云うのが、人倫的社会学に於て確立した原理である。この立場では Energy 又は Qual. としての行為 L (a) 及び Evaluation 又は Perf. としての行為 G (b) を綜合するのが認識的知覚としての社会生活 A (c) である。しかし斯様な社会生活を営むのは A のペルソナ

(仮面)をかぶった個々の個人である。この観点よりは、ペルソナをぬげば L と G を綜合する個体的な Cathectic の I (c) が表れると云うのが自由な社会学の立場である。[L, G の綜合 A は, L, G の task 的側面, 逆に I は L, G の emotional な側面の綜合である]。A 的 Control の社会人が時に I 的 Relaxation の家庭や友人や菊の花に接するのは心の釣り合いに必要であろう。

(3) の例、マートンとパーソンズ

逸脱論と局面理論の作製に影響を与えたデュルケムの概念の座標の回転としてのマートンの社会構造とアノミー 1949 に於て, A (a) は制度化手段, G (b) は文化的目標と考えられる。しかし c の I or L なる動機要素にアクセントを置いた局面, (作業論 p. 185) は彼に於て欠除している事は, 「体系」(p. 258) に指摘されている。かくてパーソンズに於てマートンのアノミーは動機要素を具備したものとして「体系」p. 258 を参考として以下の如く考察されるであろう。

a) Innovation の延長 (Comp. Accep. と Comp. Perf.) の A, b) Rebellion (Comp. Perf. と Aggr.) の G, c) Reb. (Aggr.) と Retreatism (Withd.) の I, c) Ritualism の延長としての Ret. (Withd.) と Innov. (Comp. Accept.) の L.

パーソンズに於て a(A), b(G) で c が I or L なる事は, I が Integrative Sub-system, L が, Latent-Receptive Meaning Integration (作業論 p. 182) によって明らかである。

(4) の例、ハイデッガーとニイチエ

ハイデッガー「形而上学」のコギトの構造に於て G(a) は Idee, I (b) は Nous, L (c) は Cogito の微量量としての Urwille と考えられ A (c) は彼に於て意識的に消されている。ニイチエの生物学的 Perspektiv では A は勿論, G も I も意識的に消され L のみが Leben そのものとして強調される。

文献及びその略称

- 1) Persons, Bales, Shils, Working Papers in the Theory of Action 1953 [作業論]
- 2) Parsons, Smelser, Economy and Society, Second Impression 1957 [経済]
- 3) Parsons, Essays in Sociological Theory, Revised Edition 1954 [論文集]
- 4) Parsons, The Social System 1952 [体系]
- 5) Parsons, Bales, Family 1955 [家族]

(1959年6月30日受理)